

週刊てんのうじ②

2022.8.13 施設長 徳畑等

今回は「経験」ということについて考えてみたいと思います。私はよく、この「経験」という言葉を使います。「子どもたちにとって大切なことって、やっぱり、経験、だよな」みたいな話をすることも多いです。毎日生活しているだけで、毎日「経験」は積み重ねられていきます。ですから「生きること＝経験」ということでもあります。

でも、経験はこれからつくることはできても、終わった経験は変えることはできません。減らしたり増やしたりもできません。「ああ、あの時もっとこんな経験をしてあげばよかった…」と、私自身思うことがよくあります。だからこそ、どんな時期にどんな経験がどれくらい必要で大切なのか、私たちは、これだけ社会が変容し、価値観や生き方が多様化した今日があるだけに、今一度「経験」について考えていく必要があるのではないかと感じています。

近い過去の出来事や、遠い昔でもインパクトの強い記憶や経験というものは、すぐに頭に浮かび、現在の自分の参考にしたり、反面教師にしたりして、過去の経験を活かしながら行動したり選択することができます。

しかし、人間の経験（記憶）というものは、いみじくも、胎児から乳児、そして幼児期の早い段階の経験や記憶というものが大きく影響している、というふうに言われています。もちろんそれが全てではないことも確かです。人生には、偶然や運命といった予想していなかった出来事が起きるからこそ面白い、反対に、その道だけを見てまっすぐ努力を積み重ねて進んでいく人もいるでしょう。いずれにせよ、自分が覚えていない記憶や無意識の中に刻まれている経験というものが、結構重要ということなのであれば、それは一体どんな経験が必要なのでしょう。

まずITやテクノロジーの進化によって、大人も子どもも身の回りには機器や端末（スマホ、タブレット、テレビなど）で溢れています。コロナがそれに輪をかけて後押しする形となり「視覚・聴覚（ゲーム・メディア）」が圧倒的な割合を占めています。また、子どもの言葉の発達において大切な人の顔（表情）や口の動きを見て、人に対する信頼や言葉の獲得をしていくのにあたり、ほとんどの大人が「マスク」をして、子どもたちと会話をしていることが影響し、世界中で見ても言葉の発達が遅れている子どもが非常に増えているそうです。

そして「視覚・聴覚」を含む人間にとって大切な5感のうち、残り3つの「味覚・触覚・嗅覚」は、極端に子どもたちとの接点が減っています。これもコロナの影響が非常に大きく、食事、接触、間隔など、子どもはいろんなものを実際に触れたり味わったり匂いを嗅いだり、子ども同士が密着して戯れて、泥んこになって汗だくになって、大人に甘えて抱っこされて、そうやって優しくたくましく育っていくものです。なんとか、こんな時代でもwithコロナでも、このような生身の人間としての大切な経験を取り戻せるよう、保育のあり方を大胆にシフトしていかなければ（というより原点に回帰する）いけないと感じます。

最後に、経験の中身もさることながら、私たち種の会が考えている「経験」に対する大きな捉え方、それは「経験量」の大切さです。単純なこと、難しいこと、興味のあること、協力や協調が必要なこと、スキルを伴うもの、全てにおいて「短い時間でも、繰り返し、何度も経験できる＝回数の多さ」が重要であるということです。当法人の特徴的な取り組みでもある「サーキット運動」や「運動会の取り組み（エンドレストラックリレー）」など、いずれもそのものです。

個々の子どもの個性や生き方を尊重し支援していく一方で、全ての子どもたちに本当に必要な経験は何か？また短い時間の中でいかにその経験を多くできるか？クラス全体で一律一斉に同じことを経験させるという昔のような形態とは違い、少人数やエンドレス、ワンアイテム（グッズ）あることで循環する、といった新たな発想や切り口で、子ども理解に沿った形態を模索していきたいと思います。